

科目区分: 教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校)
授業科目名: 器楽アンサンブル (2)
対象年次: 1～4年次(重複履修可)

「多重録音」を用いた新しい試みと合奏 - 感染対策を超えてその先へ ～ 2021年度の取り組み -

音楽教育講座：市川克明

1. 授業の基本情報・概要

担当教員名：市川克明（音楽）
登録学生数：19名

本授業は、管打楽器による吹奏楽および小編成アンサンブル演奏を中心に実施しており、履修生はそれぞれが演奏する楽器を選択し合奏を行う科目である。このような授業形態のため、一昨年から続く新型コロナウイルス感染対策のため、著しい制限が加えられていた。すなわち、対面授業不可であったため、昨年度は、代替課題措置として動画の提出や、スコアリーディング（合奏全体を記した楽譜を読むこむこと）などを行わせた。

しかし、これらは確かに何もさせないよりは多少は意味のある、という程度で、本来の目的である「他人と合わせる」あるいは「演奏能力の向上」という意味ではほとんど上達はみられなかった。もちろん、スコアリーディングは将来、吹奏楽や合唱の指導においては欠くことのできない能力の一つであり、また、動画作成などは教員の基本的なスキルとして今後さらに重要度が増していくことは十分予想され、授業内容が無駄だったわけではないことは言うまでもない。

このような反省を踏まえ「コロナ対策2年目」となった今年度は、なんとかして演奏の時間を確保することを主眼において様々な工夫を行なった。幸い、前期の途中6月から後期の前半にかけては制限も緩やかになり、通常の合奏が行うことができた。

しかし、1月に入り再び制限が厳しくなり、対面授業は継続したものの、合奏はほとんどできなくなり再び代替案を模索した。結果、昨年度の「多重録音」の成果を踏まえ、さらに実用的な内容にするため小編成アンサンブルではなく、合奏全体の多重録音を試みた。期せずして様々な付随効果が現れ、学生の能力向上にも役立つ内容となった。

新型コロナウイルス感染対策のために考案された内容であるが、将来的には、少子化あるいは部員数の減少のため、十分な演奏者を確保できず合奏を行うことが困難な吹奏楽部や、音楽の授業においての利用も考えられる内容となった。

2. 1 授業評価・授業研究の内容

ここでは、主として2022年1月以降の、感染対策制限下における、少人数グループあるいは個人での録音作業を中心として「多重録音」に関して報告を行う。器楽アンサンブルでの演奏曲として取り上げるため、中学校で合唱曲として頻繁に取り上げられる「旅立ちの日に」を私自身が吹奏楽に編曲を行なった。

Partitur

旅立ちの日に
Am Tag zur Abreise der Zukunft

Moderato $\text{♩} = 100$

小林 聖 作曲
坂本 洋典 作曲
市川 克明 編曲

「旅立ちの日に」～市川克明編曲

課題内容（1月～2月初旬）

第10～15回

合唱曲「旅立ちの日に」の個人による多重録音

★方法

- ① 合唱曲「旅立ちの日に」を私が編曲を行う。
- ② ピアノおよびドラムセットのみで録音する。
（スマートフォン使用）
- ③ 録音したMP3音源データを、全履修者配布する。
- ④ 録音した音源をもとに個人練習を行う。
- ⑤ 十分に練習したのちに、二人ないし三人ひと組みになり、一人が音源をヘッドセットで聴きながら演奏し、別の学生がそれを録音した。
- ⑥ その個人で演奏したMP3録音データを提出させた。
- ⑦ Garage Band を使用し、14パート全てを重ね合わせた。
- ⑧ リズムの不正確な場所や強弱などを操作し「聴くに耐えうる」合奏にした。
- ⑨ 合奏データをもとに、ドラムセット以外の打楽器（ティンパニ、クラヴェス、タンバリン、サスペンディッドシンバル、クラッシュシンバル、バスドラム、ボンゴ、マラカス、グロッケンシュピール）をそれぞれ別々に録音し、⑦の合奏に重ねた。
- ⑩ バランスや強弱を操作し合奏音源を完成させた。
- ⑪ 楽器などを撮影した。
- ⑫ iMovie を用いて、音源に撮影した楽器映像や以前撮りためた大学構内の画像を重ね、さらに、キャプションを入れ動画を完成させた。

★留意点・効果など

- 最初にピアノとドラムセットによる「伴奏パート」を完成させることによりテンポを一定にする。
- 強弱やバランスを整え、エコーやリバーブなどの効果を用いることにより聴き映えのする演奏となった。
- 普段演奏することのない打楽器を担当することにより、これらの楽器についての基礎知識が高まった。

- Youtube の限定公開で履修生にアドレスを知らせ視聴させた。自らの演奏を聴き反省するとともに、合奏の楽しさを再確認できた。

★その他

- 履修学生が専門以外の打楽器演奏を見越して、打楽器の専門家を招聘し、履修生対象の講座を実施した。（2021年11月）
- クラリネットの専門家を招聘し、全員対象にクラリネットの基礎的な指導法や楽器の取り扱い方に関する講習会を実施した。（2022年1月）

2.2 多重録音・動画作成の目的と評価

当該授業だけではなく、「部活動指導実践論」（履修者の過半数が重なっている）とタイアップさせ、吹奏楽部における多重録音の可能性を探るなど、科目横断的な活動を取り入れた。それにより、単に「多重録音」のスキルを身につけるだけではなく、その効果的な活用法にまで踏み込むことができた。

以下は、それらの学生より挙げられた効果の内容である。

- 少人数での活動での一つの指針となった。すなわち、パートがそろわない「歯抜け」の状態でも、ピアノや打楽器（ドラムセット）などを効果的に使用することにより、「形になる合奏」が可能である。
- 普段味わえない中編成での合奏を体験させることができる。
- 動画を作成することにより、例えば保護者や家族、あるいは地域の人々など幅広くその演奏を披露することができる。
- 部活動での「活動報告」あるいは、保護者や関係者（地域など）への「ビデオレター」なども作成でき、ただ部費を払ったり寄付をするだけではなく、自らの子どもの「そこそこ素晴らしい」演奏を耳にし、あるいは見ることができる。
- どのような楽器でも多重録音は可能で、個人で楽しむこともでき、コロナ禍の産んだ「副産物」と言える。

●過去のワードプロセッサやパソコンの表計算などの能力が必要不可欠になったように、今後はこのような音楽におけるICTのスキルも重要になってくることが予想される。

2. 3 編曲の法的な問題に関して

編曲に関してはかなりグレーな問題が存在する。実際には、作曲者に断りなく楽曲を改変することは禁じられているが、比較的自由に行われているのが現状である。

そのため、学校における編曲における法的な問題についても調査した。

当該合唱曲（旅立ちの日に）の権利者（音楽之友社）に確認したところ以下のような回答を得た。

これらの内容は、履修生にも伝え、将来、編曲を行う際の知識として理解させた。

●学校内などでのみ発表する場合には編曲許可は不要。

●定期演奏会や、学校外での演奏の場合には、著作権者に申請し、3万程度の権利金を支払い、スコアを1部提出すれば1年間の権利を取得することが可能である。

3. 履修生アンケート

Moodle を使用し自由記述の方法でアンケートを実施した、以下はその抜粋である。

●初めて打楽器を演奏できたことが良かった。打楽器講習でしっかりとどのよう演奏するのかを学べたことは、特に大きな学びになった。叩く位置や角度などでも変化を出せることなど、初めて知ることが多かった。

●自分の楽器以外にも触れる機会があるのは非常に学びになるし、ワクワクして楽しかったのでまたいろいろな楽器に触れてみたい。

●ドラムセットという新しい楽器に挑戦することができた。今までは自分の担当楽器以外の楽器を合奏の中で演奏することに抵抗があったが、挑戦してみてドラムセットの楽しさだけでなく、新しい楽器に挑戦することの楽しさも味わうことができた。

●ドラムセットは基本的に一つのグループの中に一つしかない楽器のため、失敗が許されない緊張感とともに、合奏を引っ張て行くという感覚があり、責任感を持って取り組むことのできる楽器だと感じた。来年度も、継続してドラムセットの演奏を続けたいと考えているため、来年後の目標はドラムセットの楽譜を読むことができるようになることと、リズムを一定のリズムで一定の大きさでたたき続けられるようになることである。

●多重録音では、個々の練習が全体に生かされているという実感を生徒が持つことができるため、有用的な活動であると感じた。新型コロナウイルスによる部活動の制限が私たちが教員になっても続いているかどうかはわからないが、こういった制限下での活動の工夫として生かしていきたい。

●多重録音は、こんなに幅の広いことが出来るのだと気付くことが出来ました。しかし、他の人のスマホを借りないと聞いたり録音することが出来ないというのが今後の課題なのかなと思います。一人ですべて完結できればもっと楽であるし、もっと音程の操作やリズム操作など、曲として仕上げる過程の細かい操作ができるとクオリティの高い作品が出来るから楽しいなあと思いました。しかし、生で大人数で演奏ができる喜び以上のものはないので、早くコロナが収まってくれることを願います。

●コロナ禍ということもあり、平時では体験できないような多重録音や座学の授業などを受けることができ、学ぶことも多かったし、状況に柔軟に対応してどんどん新しく楽しいことを考えていくスタイルにとっても感化された。

●私は中学校の吹奏楽部で「フルートを担当できなければ打楽器をしたい」と感じていたほど、以前から打楽器に興味があったのだが、打楽器という括りの中にも様々な楽器があるため、学んだり経験したりする機会に巡り合えずにいた。そこで、今期の器楽アンサンブルでの打楽器の先生にお越しいただいて実際にご指導いただいたことや、小グループに分かれて行ったアンサンブルで打楽器（ティンパニ）を経験し、音の替え方や叩き方を学べたことが非常に貴重な経験で嬉しかった。2つ目は、最後の多重録音でのお別れ映像についてだ。音楽関係の部活はもちろん、自クラスの解散時期や卒業時にあのような映像をつくると、

思い出の振り返りになり素敵だと感じたため、学校現場に出た時に活用したいと考えた。

●特に打楽器に関して学べたことがとても良い経験になったと感じている。これまで、音楽の授業や部活動でも打楽器を経験する機会が少なく、基本的なスティックの持ち方や、楽器の取り扱い方等ほぼ何も知識もなく、演奏したこともほとんどなかった。

●基礎的な練習方法や楽器のメンテナンスについて多くの知識を得ることができた。

●コロナウイルスが流行しているから、合奏・演奏をあきらめるのではなく、多重録音など様々な合奏の在り方を考えることができた。今、中学校や高校では、合唱や合奏は控えることとなっており、吹奏楽部等の部活動も行えていないのが現状だ。このような現状の中でも、新たな合奏の在り方を模索し、少しでも子供たちの音楽活動の経験を増やしていきたい。そのためにも、多重録音の編集の技術も大学生のうちに身に付けておきたいと感じた。何より、この授業をとおして、クラリネット練習方法・指導方法を中心に様々な楽器についての理解を深めることができた。

●専門楽器だけでなく打楽器にも挑戦したことが印象に残っている。ドラムやティンパニなどの複雑で難しい打楽器をしたわけではないが、拍の頭でズレなくきっちり入ることが想像していたより難しく、また少し力を入れ方を変えるだけでクラベスの音が変わるということも初めて経験した。

●「旅立ちの日に」は合唱曲であり、この曲で合奏をすると知った時は非常に驚いたが、実際に多重録音を行い完成したものを聴いてみると感動し、多重録音も音楽を楽しむ手段のひとつとして可能性が見えたように思う。

4. 総括

教育学部における音楽専攻学生の減少に伴い、履修生も少なくなっている。数年前は最大で70名以上の履修生がいたこともあったが、その意味では20名は手頃な人数ではあるように思う。また、楽器のバランスも比較的良好で、様々な楽器がそろったことはやりやすい点であった。

さらに、ピアノ専門学生が多いため、ピアノを用いたアンサンブルは非常に充実し、これは愛媛大学教育学部の一つの特徴ともなり得ると感じた。すなわち、吹奏楽現場では比較的少ない、ピアノを入れたアンサンブル活動の充実である。学生にとっては得意楽器であるピアノを使用することにより、将来実際に合奏を行う際には、生徒により有意義な指導が可能である。

アンケートにもあった通り、今回の合奏の多重録音は様々なポジティブな効果を生んでいる。普段演奏することのなかった打楽器を演奏したり、また、打楽器やクラリネットの講師を招いての初心者の指導法や、楽器の扱い方などを学んだことは非常に有意義であった。

また、動画作成をすることにより「記録」を残せたことは特筆に値する点である。外部での演奏が困難かつ、学校内でも自由に演奏のできない状況下で、多重録音を用いた動画作成は一つの活動として、感染対策の代替ではない内容に「昇華」できる可能性を持っている。

最後に、強調したいのは常日頃から伝えている、「穴系」（フルート）、「リード系」（クラリネット・サクソフォーンなど）、「唇系」（金管楽器全般）、「叩く系」（打楽器）の四種を満遍なく「触れること」の重要性である。吹奏楽の指導においては、これは四種の楽器群の知識が必要不可欠である。自分の専攻以外にこれら全てを「広く浅く」学ぶことは教育学部の音楽教育において大きなアドヴァンテージと言える。

また、この科目を履修した学生に中から有志で外部での演奏会を実施する。その際、日本を代表するフルート奏者を招聘するが、専門家との共演は、将来音楽を専門とする学生にとっては非常に重要であると考えられる。



2022年3月13日（日）に延期された演奏会のチラシ